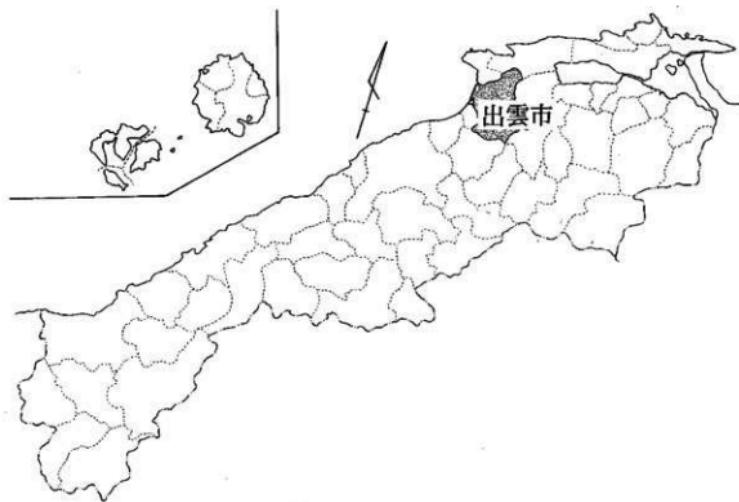


# 上塩治横穴墓群第34支群発掘調査報告書

1998年3月

出雲市教育委員会

# 上塩冶横穴墓群第34支群発掘調査報告書



1998年3月

出雲市教育委員会

# 序

出雲市上塩治町に位置する上塩治横穴墓群は、全国最大規模の横穴墓群として知られています。横穴墓は出雲の古墳時代終末期を特徴づける遺跡で、この頃、全国的に群集墳が発達していたことを考えると、横穴墓が発達していた出雲は異彩を放っていると言えます。

本書が、今後の横穴墓研究の助成をなし、市民の方々に文化財保護についてご理解いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・報告書の作成にあたっては、地元の方々、関係機関に多くのご指導とご援助を賜りました。ここに厚く御礼申し上げるとともに、今後とも出雲市文化財行政の推進にご協力いただけますようお願い申し上げます。

平成10年3月

出雲市教育委員会  
教育長 多 久 博

## 例　　言

1. 本書は、ウッド開発の委託を受けて、出雲市教育委員会が平成4・5年度に実施した上塩治横穴墓群第34支群1～5号穴の発掘調査と、出雲市道路河川課の委託を受けて、出雲市教育委員会が平成8年度に実施した、市道塩治291号線道路新設工事に伴う上塩治横穴墓群第34支群6号穴の発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘地は、次の通りである。

上塩治横穴墓群　鳥根県出雲市上塩治町1596-7ほか

3. 調査組織は次の通りである。

<平成4・5年度>

調査主体	出雲市教育委員会
事務局	下垣 晴司（文化・スポーツ課長）
調査員	松山 智弘（文化・スポーツ課主事）
調査協力	川上 稔（出雲市教育委員会）・岸 道三（同）・湯村 功（同） 米田美江子（同）・西尾 克己（鳥根県教育委員会）・原田 敏照（同）

<平成8年度>

調査主体	出雲市教育委員会
事務局	後藤 政司（文化振興課長）
調査員	遠藤 正樹（文化振興課主事）、岸 道三（同）
調査指導	西尾 克己（鳥根県教育委員会主幹）、守岡 正司（鳥根県教育委員会主事） 平石 充（同）
遺物整理	飯国 陽子、遠藤 恭子、太田 和子、吹野 初子

4. 調査にあたり、土地所有者であるウッド開発には全面的な援助・協力を得た。
5. 報告書作成にあたって、上塩治横穴墓群について、守岡正司（鳥根県教育委員会主事）に、伊万里染付碗については、平石 充（同）に、古錢については、西尾克己（鳥根県教育委員会主幹）の各氏に指導を受けた。
6. 天井形式の名称については、山陰横穴墓検討会編『第7回 山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓－その形式・変遷・地域性－』1997年により、カマボコ形を呈するものを「アーチ形」、家形を呈し妻入のものを「家形妻入」、同様に平入のものを「家形平入」に分類した。  
なお、建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』1980年によれば、上塩治横穴墓群の大半は「整正家形」に分類され、この用語も一般的に使用されているが、「整正家形」とされているものの中でも、側壁の立ち上がりに違いが確認できるため、「家形」という用語を使用した。
7. 本書で使用した方位は磁北をしめす。
8. 平成4・5年度調査については、遺物の実測・写真撮影を松山が行った。遺物及び遺構の清書は、松山・永田節子・鶴口令子・石川桂子が行い、松山が執筆した。  
平成8年度調査については、遺構の実測・遺構・遺物の写真撮影は遠藤・岸が行い、遺物の実測は遠藤が行った。遺構・遺物の清書は、遠藤・遠藤恭・太田・吹野が行い、遠藤が執筆した。  
本書の編集は松山と遠藤が行った。
9. 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真は出雲市教育委員会で保管している。

# 上塩治横穴墓群第34支群発掘調査報告書

## 目 次

序 文

例 言

目 次

目 次

挿図目次

図版目次

第1章. 調査に至る経緯と調査の経過 .....	(遠藤)	1
第2章. 周辺の歴史的環境 .....	(々)	2
第3章. 遺跡の概要 .....	(々)	6
1. 上塩治横穴墓群の概要 .....		6
2. 第34支群の概要 .....		10
第4章. 遺構と遺物 .....		13
1. 上塩治横穴墓群第34支群 .....		13
1. 1号横穴墓 .....	(松山)	13
2. 2号横穴墓 .....	(々)	14
3. 3号横穴墓 .....	(々)	15
4. 4号横穴墓 .....	(々)	17
5. 5号横穴墓 .....	(々)	21
6. 6号横穴墓 .....	(遠藤)	22
2. その他遺構 .....	(々)	24
1. 土壙墓 .....		24
3. 遺構外出土遺物 .....	(松山)	25
第5章. 総 括 .....	(遠藤)	27
観 察 表 .....		30
図 版		

## 上塙治横穴墓群第34支群発掘調査報告書

### 挿図目次

第1図 試掘トレンチ位置図	1	第12図 第34支群3号横穴墓出土遺物 (2)	16
第2図 周辺の遺跡	4	第13図 第34支群4号横穴墓土層図・遺物出土状況	18
第3図 上塙治横穴墓群支群分布図	8	第14図 第34支群4号横穴墓	19
第4図 上塙治横穴墓群第34支群横穴墓配置図	11	第15図 第34支群4号横穴墓出土遺物 (1)	20
第5図 上塙治横穴墓群第34支群断面図	12	第16図 第34支群4号横穴墓出土遺物 (2)	20
第6図 上塙治横穴墓群第34支群立面模式図	12	第17図 第34支群5号横穴墓	21
第7図 第34支群1号横穴墓	13	第18図 第34支群6号横穴墓	23
第8図 第34支群1号横穴墓出土遺物	14	第19図 土壙墓実測図	24
第9図 第34支群2号横穴墓	15	第20図 土壙墓出土古銭	25
第10図 第34支群3号横穴墓	15	第21図 土壙墓出土染付碗	25
第11図 第34支群3号横穴墓出土遺物 (1)	16	第22図 遺構外出土遺物	26

### 図版目次

図版1…大井谷遠景（右側の建物の裏が34支群）	図版10…横穴墓配置状況（右から4号横穴墓、5号横穴墓、6号横穴墓）
第34支群発見状況	横穴墓配置状況（左から6号横穴墓、5号横穴墓、4号横穴墓）
図版2…1号横穴墓完掘状況	国版11…6号横穴墓土層堆積状況（正面から）
1号横穴墓遺物出土状況	6号横穴墓土層堆積状況（玄室部分）
2号横穴墓完掘状況	図版12…羨道部壁面加工痕
図版3…3号横穴墓床検出状況	玄室壁面加工痕
3号横穴墓遺物出土状況	図版13…6号横穴墓平面プラン
図版4…3号横穴墓遺物出土状況	作業状況
3号横穴墓完掘状況	図版14…土壙墓土層堆積状況（北側から）
図版5…4号横穴墓検出状況	肥前系染付碗出土状況
4号横穴墓前庭部完掘状況	古銭出土状況
図版6…4号横穴墓羨門部遺物出土状況	図版15…6号横穴墓と土壙墓
4号横穴墓前庭部完掘状況（上から）	土壙墓完掘状況
4号横穴墓前庭部土層堆積状況	土壙墓加工痕
図版7…4号横穴墓玄室完掘状況	図版16…第34支群1号横穴墓出土遺物
4号横穴墓棺台	第34支群3号横穴墓出土遺物
図版8…4号横穴墓羨門部完掘状況	図版17…第34支群4号横穴墓出土遺物
4号横穴墓玄室前壁	第34支群遺構外遺物
4号横穴墓玄室側壁	図版18…土壙墓出土古銭
図版9…5号横穴墓半さい状況	肥前系染付碗
5号横穴墓羨門	
5号横穴墓完掘状況	

## 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

ウッド開発（出雲市上塩治町1610 代表 吉田定美）は、敷地内において土地造成工事を施工されていたが、平成4年7月、工事中に横穴墓が3基発見された。須恵器等の遺物も出土していることから、市教委は工事を中断させ、発見された横穴墓群を上塩治横穴墓群第34支群と命名し、同年7月16日より約1週間の予定で緊急の発掘調査を実施した。そして翌年になりウッド開発が隣接地についても土地造成工事を計画され、遺跡の現状保存も困難であったことから、同年8月20日に隣接地の発掘調査を実施した。発掘調査は同年9月22日に終了した。

調査の結果、西南に開口する横穴墓を6穴確認したが、試掘調査で確認された6号横穴墓については、造成範囲外であったことから現状保存することとなった。

その後、出雲市道路河川課が、南部大型農道関連整備事業により、平成8年度事業として市道塩治291号線道路新設工事を計画され、平成8年2月5日、市教委は道路河川課より埋蔵文化財の調査について依頼を受けた。このため6か所にトレーンチを設定し、同年3月11日から22日まで実働8日間をかけて試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、T-1から現状保存されていた6号横穴墓を再び確認した。

当該地は上塩治横穴墓群第34支群として周知されており、横穴墓を確認していることから、この結果を踏まえ、市教委と道路河川課が協議し、同年4月5日に埋蔵文化財発掘調査の通知（98条の2）を提出し、同年5月7日より発掘調査を開始した。

調査の結果、試掘で確認されていた6号横穴墓のほか、近世の土壙墓を1穴確認し、肥前系染付碗や寛永通宝などが確認された。

調査は同年5月30日に終了した。

第一回 試掘トレーンチ位置図



## 第2章 周辺の歴史的環境

山陰有数の穀倉地帯として知られる出雲平野は、北山山脈と中国山脈に挟まれた沖積平野である。このような沖積作用が開始されたのは弥生時代と考えられており、現在の地形に定着したのは、斐伊川が江戸時代頃に大きく東に流路を替え、宍道湖に注ぐようになってからである。

縄文時代の出雲平野は、縄文海進によりその大部分が海面下であったと考えられ、平野北辺の菱根遺跡（114）・三田谷I遺跡（5）・矢野遺跡（127）・天神遺跡（20）などの遺跡が知られている。

弥生時代になると、中期に遺跡が爆発的に増える。沖積平野の自然堤防上には矢野遺跡（127）・天神遺跡（20）・知井宮多門院遺跡（80）・古志本郷遺跡（62）・正蓮寺周辺遺跡（71）などの大規模集落が占有するようになり、出雲平野に居住地域が拡大した。しかし知井宮多門院遺跡（貝塚）の弥生後期の混貝層から相当数の海水性貝類が確認されているため、出雲平野は入海の様相を呈していたと推測される<sup>(1)</sup>。この頃、斐伊川沿いの西谷丘陵には西谷墳墓群（38）が突如出現する。このうち四隅突出型墳丘墓である3号墓からは、吉備系の特殊土器が確認されており、吉備地域との関連が窺われる。その後、入海は閉鎖され潟湖を形成したと見られ、多門院遺跡（貝塚）からは古式土師器とともに淡水性ヤマトシジミが確認されている<sup>(2)</sup>。

古墳時代初頭の集落は弥生時代から継続するものが多く、斐伊川・神戸川流域の矢野遺跡や古志本郷遺跡といった集落のほか、神西湖周辺の低丘陵上にも集落があったと考えられている。

古墳時代前期の古墳では、平野北辺の大寺古墳と西辺に位置する山地古墳（96）が知られるのみであるが、これらの古墳はいずれも古墳時代前期後半と推定されており、出雲平野における首長系譜は一時断絶したと考えられている。

古墳時代中期の古墳は、あまり多くはないが、北光寺古墳などが造られるようになる。

一方、神西湖周辺の低丘陵、出雲平野北側の低地・丘陵にある集落は、引き続き継続するものが多いものの、斐伊川・神戸川流域の低地に営まれた集落は消滅衰退していった。

斐伊川・神戸川流域の集落のうち、三田谷I遺跡からは古墳時代中期の竪穴式住居跡が確認されている。平面プランは方形で覆土や包含層中からは多量の竪穴片<sup>(3)</sup>が出土している<sup>(4)</sup>。斐伊川・神戸川流域の低地では、この時期の集落跡の確認例が少なく、貴重な史料と言える。

古墳時代後期に入ると、古墳の数が爆発的に増える。県下最大級の規模を持つ大念寺古墳（23）は、版築状互層とよばれる高度な土木技術を用いており、墳丘が崩壊しないように工夫されている。内部主体は自然石や割石によって両袖式複室構造に造られた横穴式石室で、奥室の家型石棺は全国最大級の規模を有する<sup>(5)</sup>。また、上塙治築山古墳（12）は凝灰岩の切石によって造られた県下最大級の両袖式横穴式石室を有し、玄室内には家型石棺2基を備えている。ともに馬具類などの豊富な副葬品が確認されており、出雲平野を支配する有力者の墓であると考えられている<sup>(6)</sup>。

一方、集落は古墳時代中期に衰退していった斐伊川・神戸川流域の集落が再び活性を帯び、低地にも人々が戻っていく傾向が見られる。

古墳時代後期後半から終末期に入ると、横穴式石室を主体部とする古墳に代わって横穴墓が増加する。神門川西岸に所在する神門横穴墓群（88, 89, 91, 92, 93）は、凝灰質砂岩の岩盤に造墓された横穴墓

で、100穴以上が確認されている。これらの大部分はアーチ形天井の横穴墓で、現在のところ、出雲西部では最も古い形態の横穴墓と考えられている。また神門川東岸に所在する上塩治横穴墓群（1）は、凝灰岩の岩盤に多数の横穴墓が掘削されて群を形成しており、8世紀代まで追葬という形で使用されていた<sup>(1)</sup>。横穴墓の多くは盗掘により開口しているが、平成9年10月現在のところ38支群171穴が確認されている<sup>(2)</sup>。

歴史時代になると仏教が流行し、その影響から火葬が行われるようになる。神戸川左岸丘陵にある小坂古墳（53）では石櫃の中に綠青が確認されており、銅製藏骨器が認められていたと推測されることから、出雲においても火葬が早くより実施されていたと考えられる<sup>(3)</sup>。

また初期の仏教は氏族的色彩が濃厚であったが、やがて国家が仏教を掌握する国家仏教の段階に移行し造寺が奨励される。

奈良時代から平安時代に創建された寺跡では、神門寺境内廃寺（17）、長者原廃寺（32）などがあり、瓦類が出土している。神門寺境内廃寺で確認された軒丸瓦には、瓦当下端に三角状の突起を持つ「水切瓦」と呼ばれるものがある<sup>(4)</sup>。

中世になると、塩治の地に出雲国守護所が設置され、塩治氏が守護職に就いた。この時期には、塩治氏の存在が顕著になったためか、山城や居館が多く造られる。上塩治においても向山城（28）、半分城（7）、大井谷城（13）などの山城が築城されており、それらは出雲西部の要衝地に占地している。しかし、高貞没後は政治の中心が出雲東部の富田郷に移った<sup>(5)</sup>。

近世になると、松江藩の土地政策により斐伊川の改修が実施された。改修前における斐伊川は多数の河除（川除）による小河川であったが、これにより斐伊川は一本の大河川に統合され、出雲平野の新田開発が進むことになる。斐伊川左岸に開削された来原岩橋（39）や間府岩橋（44）は、物資輸送や農業用水の確保に利用されていた。このような松江藩の水利政策は、出雲平野を山陰有数の穀倉地帯にした<sup>(6)</sup>。

註（1） 川上 稔 「出雲平野の形成」『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』 1980年

（2） 註（1）と同じ

（3） 島根県教育委員会編 「島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報V」 1997年

（4） 出雲市教育委員会編 「史跡今市大念寺古墳保存修理工事報告書」 1984年

（5） 林 錠亮編 「上塩治横穴墓第20・21支群 一斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II-」 島根県教育委員会・建設省出雲工事事務所 1995年

（6） 守岡正司 「出雲市上塩治横穴墓群」『第7回 山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓 一その形式・変遷・地域性-』 1997年

（7） 島根県教育委員会 主事 守岡正司氏の御教示を得た。

（8） 西尾克己・大國晴雄 「出雲平野の古墳 出雲市民文庫9」 出雲市教育委員会 1991年

（9） 川上 稔・西尾克己編 「神門寺境内廃寺 一第1次発掘調査概報-」 出雲市教育委員会 1983年  
川上 稔・西尾克己編 「神門寺境内廃寺 一第2次発掘調査概報-」 出雲市教育委員会 1984年

（10） 註（9）と同じ

（11） 美多 実 「土工遺跡」『出雲市の文化財 第一集』 1956年

## 第3章 遺 跡 の 概 要

### 1. 上塩治横穴墓群の概要

出雲平野南側丘陵に位置する上塩治横穴墓群は県内最大の横穴墓群である。横穴墓は縦横に織りなす谷合にそれぞれの支群を形成しており、平成9年10月現在、横穴墓は38支群171穴を数え、その数はさらに増える可能性がある<sup>(1)</sup>。この横穴墓群が知られるようになったのは、門脇俊彦氏や池田満雄氏の紹介によるところが大きいが、当初確認されていた横穴墓は、大井谷を中心とした8支群21穴のみであったので、これを大井谷横穴群と呼んでいた<sup>(2)</sup>。

その後、島根県教育委員会等の調査を経て、昭和55年には『上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』により、32支群107穴が知られるところとなったが、横穴墓群が大井谷だけではなく、三田谷や半分にも広がりを持つことが判明し、大井谷横穴群の名称が不適当になった。このため報告書では上塩治横穴群の名称が使用されている。

この横穴墓群は、昭和30年以降、数度にわたり発掘調査も行われてきた。

昭和30年には、美多実氏によってエーゲ支群と別称される第6支群の発掘調査が実施された。発掘調査は確認されている5穴のうち1～4号の4穴について行われ、いずれも四壁と天井部の界線が明瞭に認められる家形妻入形式の横穴墓であることが確認された。

島根県教育委員会の発掘調査は、昭和37年に近藤正氏によって行なわれた第32支群（工業高校裏支群）の発掘調査に始まる。調査の結果、1号穴からは左右に2個の組合せ式石棺が確認され、6号穴からも組合せ式石棺が1個確認された。これらはいずれも横口式の形態を備えている。

昭和53年には、島根県教育委員会により第17支群（岸宅裏支群）について部分的に発掘調査が実施された。この支群の分布範囲は広く、支群の中でも2～3の小支群が認められる。天井形式は家形平入のものも確認できるものの、基本的には家形妻入を中心とするものと見られる。

昭和54年には、島根県教育委員会が第22支群の発掘調査を実施した<sup>(3)</sup>。

第22支群は上塩治横穴墓群最大の支群である。当時はこのうちの1・8・10号穴の発掘調査が実施された。3穴とも天井形式は家形妻入で、1号穴からは金銅装大刀の残欠が確認されている。

同年、出雲市教育委員会は第27支群の発掘調査を実施した<sup>(4)</sup>。

第27支群は高压送電線鉄塔工事に伴い4穴が発掘調査されている。天井形式はアーチ系の天井を中心としているが、これらの横穴墓は軒を造り出しているため四壁と天井の界線が明確に認められる。

平成2年には、浄福寺の移転に伴う土地造成中に発見された第33支群を出雲市教育委員会が発掘調査している。盗掘を受けているものの、1号穴からは金銅装大刀、金環などが確認された。

平成3年からは斐伊川放水路建設事業に伴い島根県教育委員会が建設省の委託を受けて発掘調査を実施している<sup>(5)</sup>。

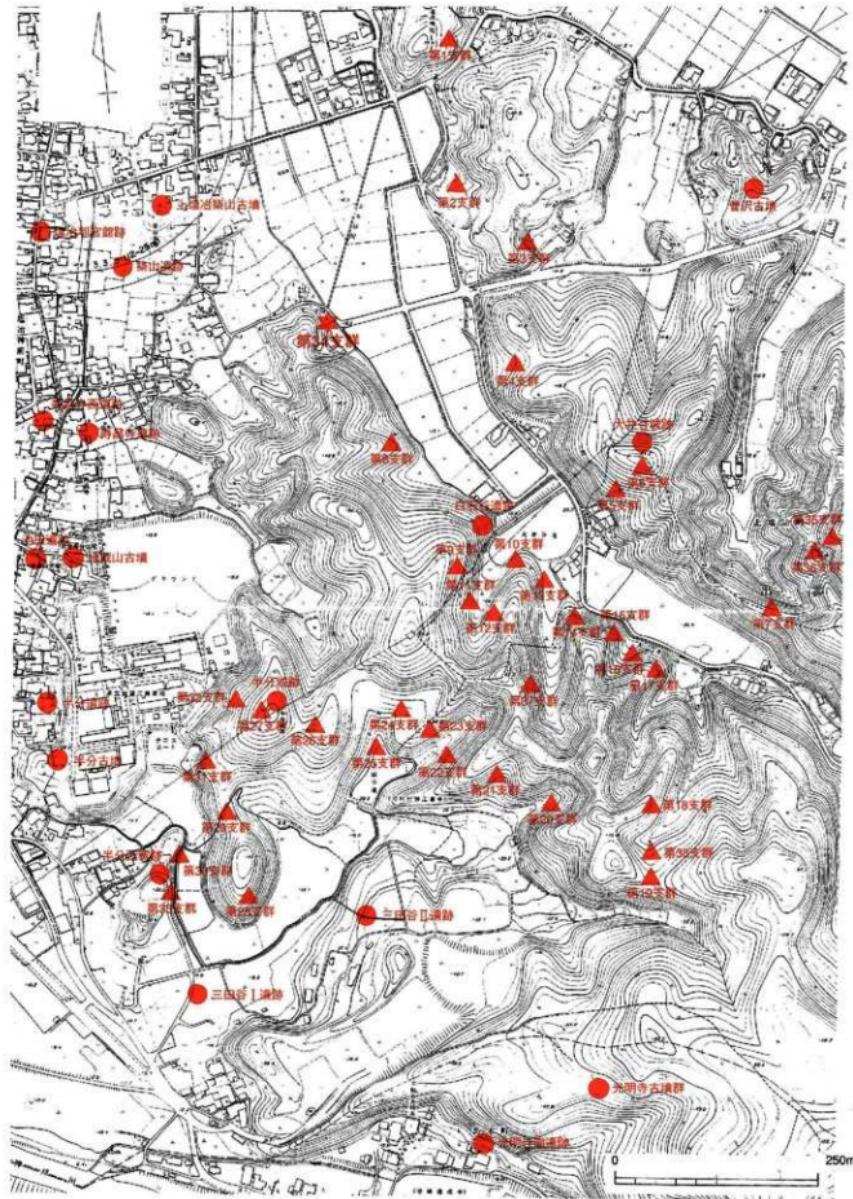
平成4年には、第14・15・16・20・21支群の試掘調査が島根県教育委員会により実施された。試掘調査の結果、広範囲に横穴墓の分布が認められ、島根県教育委員会は同年度に第14・15・20・21支群の

# 上塙治横穴墓群一覧表

支群	確認数	主 体 部	形 態	岩 質	副 品	調 企 便	文 献	備考
1	1		家形妻入					
2	1				須恵器、耳環			消滅
3	2		家形妻入、アーチ		須恵器			
4	2			凝灰岩	須恵器、耳環			
5	2			凝灰岩				
6	5	屍床	家形妻入	凝灰岩		美多実55	文献①	
7	4		家形妻入、アーチ	凝灰岩	須恵器	県教委94、96	文献② 文献③	
8	5			凝灰岩				
9	1		家形妻入	凝灰岩				
10	5		平穴井	凝灰岩				
11	2			凝灰岩				
12	9		アーチ	凝灰質砂岩		県教委96	文献④	
13	4		アーチ	凝灰岩				
14	10		アーチ、ドーム、家形妻入	凝灰岩など		県教委92	文献⑤	
15	4		家形妻入、アーチ	凝灰岩など		県教委92	文献⑥	
16	3		家形妻入	凝灰岩		県教委93	文献⑦	
17	14	屍床	家形妻入・家形平入	凝灰岩	須恵器、耳環、鉄鏡、直刀、上節質土器	県教委78 市教委96	文献⑧	
18	2		家形妻入	凝灰岩	須恵器、小下	市教委97		
19	4		家形妻入	凝灰岩	須恵器、土師器、鉄製品	市教委97		
20	5	屍床	家形妻入・家形平入	凝灰岩	須恵器、金銅鏡	県教委92	文献⑨ 消滅	
21	10	屍床	家形妻入	凝灰岩	須恵器、鉄鏡、鍔釘、直刀、金条、土器、金銀鏡	県教委92	文献⑩	
22	21	石室・屍床 有縫屍床	家形妻入	凝灰岩など	須恵器、土器、金銅鏡大刀、馬具、金葉環、土鏡、鐵鏡、鍔釘、直刀、刀子、鍔釘	県教委79、95	文献⑪ 文献⑫ 文献⑬	
23	7	屍床・有縫屍床	アーチ、家形妻入	凝灰岩	須恵器、土師器、鉄器、耳環、鉄鏡、鐵鑑	県教委93	文献⑭	
24	1		家形妻入	凝灰岩				
25	2	側壁に朝込	家形妻入	凝灰岩				
26	1		家形妻入	凝灰岩				
27	4		アーチ	凝灰岩	須恵器、金環	市教委79	文献⑯ 消滅	
28	2		家形妻入	凝灰岩など			文献⑰	
29	2							
30	0					市教委 90		
31	2	家形石棺	家形妻入					
32	12	家形石棺	アーチ、家形妻入	凝灰質砂岩		県教委62、96	文献⑱	
33	8		アーチ、家形妻入		須恵器、鉄鏡、耳環、金銅鏡大刀	市教委90 県教委96	文献⑲ 消滅	
34	6	屍床・棺台?	アーチ	凝灰質砂岩 (?)	須恵器、土師器、銀環、刀子	市教委92、93、96	文献⑳	消滅
35	1		家形妻入	砂 岩	須恵器、土師器、耳環、鐵製鋸齒鋸、ガラス小玉、メタウカホ	県教委94	文献⑳ 消滅	
36	3		ドーム、家形妻入		須恵器、大刀、馬具、實口只	県教委94	文献⑳ 消滅	
37	1		家形妻入	凝灰岩	須恵器、升井土師器	市教委97		消滅
38	3		家形妻入	凝灰岩	須恵器			
	171							

## 文 献

- ① 県都昭・西尼克己編 「上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書」 建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会 1980年
- ② 島谷芳雄編 「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 大井谷石切場跡・上塙治横穴墓群第14支群・上塙治横穴墓群第16支群」 建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会 1997年
- ③ 林能充編 「上塙治横穴墓群第20・21支群 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」 建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会 1995年
- ④ 西尼克己編 「中国電力高圧送電線事故等にともなう半分城跡横穴墓群発掘調査報告書」 出雲市教育委員会 1979年
- ⑤ 鳥根県教育委員会編 「鳥根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センター一年報Ⅳ」 1995年
- ⑥ 鳥根県教育委員会編 「鳥根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センター一年報Ⅳ」 1996年
- ⑦ 鳥根県教育委員会編 「鳥根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センター一年報V」 1997年
- ⑧ 鳥出徳幸・西尼克己 「出雲・上塙治横穴墓群第22支群」 「鳥根県埋蔵文化財調査報告書 第XII集」 鳥根県教育委員会 1986年



第3図 上塩冶横穴墓群支群分布図

本調査を実施し、平成5年度に第16支群の本調査を実施した。

第14支群は小形のものが多く、天井形式が家形妻入やアーチ形など一様でない。支群の中には3つ程度の小支群が認められ、10号穴からは出雲4期<sup>(8)</sup>の蓋が出土している。

第15支群はいずれも盗掘を受けているが、1号穴からは「各」のヘラ書き文字を刻んだ蓋が出土しており、「額田部臣」との関係も考えられることから貴重な文字史料である。

第16支群は第15支群と向き合う丘陵斜面に西方向に開口する横穴墓群である。盗掘を受けているが、須恵器類が出土している<sup>(9)</sup>。

第20・21支群は家形妻入の天井を中心とする支群である。これらの支群は全て盗掘を受けているが、第21支群9号穴からは金糸が確認されており、被葬者を考える上で貴重な資料である<sup>(10)</sup>。

一方、平成4・5年度には出雲市教育委員会が6穴よりなる第34支群を確認し、翌年度までに民間開発により保存が困難となった5穴の発掘調査を実施した。

平成6年度には、斐伊川放水路事業に伴い島根県教育委員会が第7・35・36支群の発掘調査を実施した。これらの支群は大井谷の東側丘陵に位置し、現在のところ上塙治横穴墓群の最東端に位置している<sup>(11)</sup>。

平成7年度には、島根県教育委員会による第22・23支群の発掘調査が実施された。第22支群は昭和54年に一部調査がされているが、21穴が確認され7つ程度の小支群が認められる。このうち9号穴からは金糸や金環・馬具などが確認されている。また第23支群からも耳環・大刀などが出土しており、有力な被葬者が考えられる<sup>(12)</sup>。

平成8年度には、島根県教育委員会による第7・12・28・33支群の発掘調査が実施された。このうち第33支群からは横山式家形石棺が確認されている<sup>(13)</sup>。

調査が進行するに伴い横穴墓の確認数も160穴を越え膨大な数になってきた。放水路のルート変更もできないため、発掘調査による事業の大幅な遅延が懸念されるようになった。

このため平成8年度より出雲市教育委員会も上塙治横穴墓群の調査に参入し、第17支群14穴の調査を実施した。一方、放水路事業以外でも、保存されていた第34支群6号穴が、市道新設工事のため現状保存が困難となり、出雲市教育委員会により発掘調査が実施された。

平成9年度は、出雲市教育委員会により第18・19・38支群の発掘調査が実施されている。

註（1） 島根県教育委員会 主事 守岡正司氏の御教示を得た。

（2） 池田満雄 「大井谷横穴群」『出雲市の文化財 第一集』 出雲市教育委員会 1956年

（3） 角田徳幸・西尾克己 「出雲・上塙治横穴群第22支群」『島根埋蔵文化財調査報告書 第XII集』島根県教育委員会 1986年

（4） 西尾克己編 「中国電力高圧送電線鉄塔工事にともなう半分城跡横穴群発掘調査報告」島根県教育委員会 1979年

（5） 林 健亮編 「上塙治横穴群第20・21支群 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II」

島根県教育委員会・建設省出雲工事事務所 1995年

（6） 大谷晃二 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』 1994年

（7） 鳥谷芳雄編 「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書III」

大井谷石切跡・上塙治横穴墓群第14支群・上塙治横穴墓群第15支群・上塙治横穴墓群第16支群

島根県教育委員会・建設省出雲工事事務所 1997年

（8） 註（5）と同じ

（9） 島根県教育委員会編 「島根県教育庁文化課 埋蔵文化財調査センター年報Ⅲ」 1995年

（10） 島根県教育委員会編 「島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター年報Ⅳ」 1996年

（11） 島根県教育委員会編 「島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター年報V」 1997年

## 2. 上塩治横穴墓群第34支群の概要

県内最大の横穴墓群である上塩治横穴墓群は出雲平野南側丘陵に位置し、縦横に織りなす谷合いで各支群を形成している。平成9年10月現在、横穴墓は38支群171穴を数え、その数はさらに増える可能性がある<sup>(1)</sup>。

このうち第34支群は大井谷の入口西側斜面に所在である。南東方向に開口する横穴墓が6穴と上塙墓が1穴確認されている。

当支群は平成4年7月に民間開発に伴い偶然発見され、北側から順に1～6号横穴墓と命名された。後世に削平を受けたことや、横穴墓が造墓されている凝灰質砂岩の岩盤が軟質であるため起きた崩落などから、天井が欠落している横穴墓が大半であったが、残存する界線から第34支群の横穴墓の天井形式は大部分がアーチ形であると推定され、家形妻入形式の多い谷奥とは形態を異にしている。

1～3号横穴墓は、4～6号横穴墓と比較するとやや低い位置に並んで開口している。

北側の1号横穴墓と2号横穴墓は、後世の削平により残存状況が悪く、玄室の大部分を失っているが、3～6号横穴墓は天井の残りが悪いものの、平面プランは比較的良好残っている。

1号横穴墓は6穴の中で最も北側に位置する横穴墓で、後世の削平により玄室の一部が残されているだけであるが、残存する界線から天井形式はアーチ形と推定される。

2号横穴墓は1号横穴墓の隣に位置する横穴墓で、後世に受けた削平のため、玄室の大部分を失っているが、残存する界線から天井形式はアーチ形と推定される。

3号横穴墓は後世の削平により天井の大部分を失っているが、天井形式はアーチ形と思われる。平面プランは比較的よく残っている。平面プランは縦長を呈しており、上塩治横穴墓群で見られる横穴墓の中では特殊である。

4～6号横穴墓は、やや高い位置に並んで開口している。

4号横穴墓は6穴の中で最も残りの良い横穴墓で、天井がかなり崩落しているものの、残存する界線からアーチ形の横穴墓と考えられている。平面プランは3号横穴墓と同様に縦長を呈している。

5号横穴墓は4号横穴墓の南側に位置する横穴墓で、後世の削平により天井の大部分を失っているが、残存する界線からアーチ形の天井形式を呈するものと推定される。

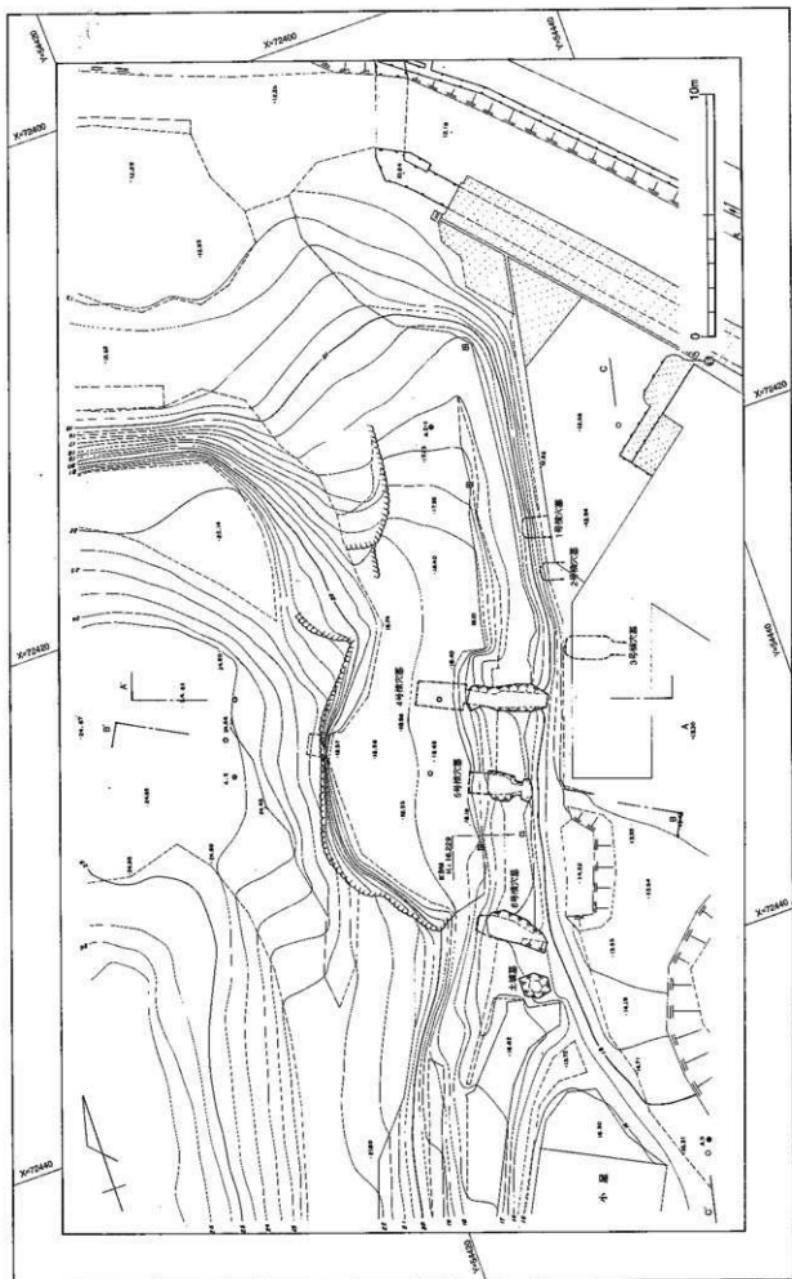
6号横穴墓は6穴中最も南側に位置する横穴墓で、後世の削平により天井の大部分を失っている。残存する界線から天井形式はアーチ形と推定される。

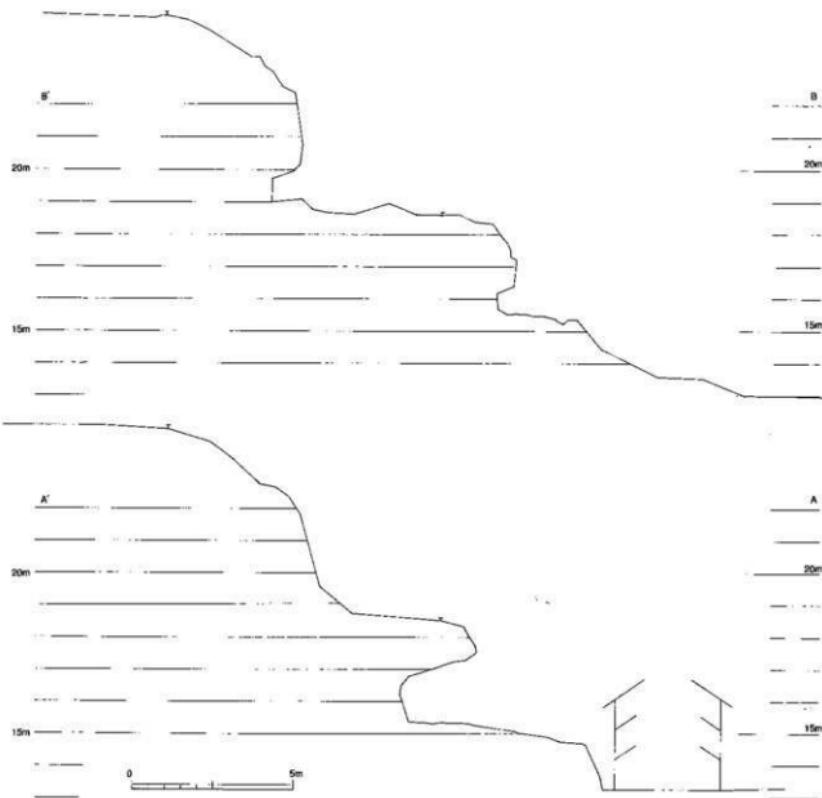
現在のところ、アーチ形の天井は家形妻入形式の天井に先行するものと考えられており<sup>(2)</sup>、アーチ形の天井が多く見られる第34支群は、上塩治横穴墓群の中でも占い支群の一つであると推定される。

註（1） 島根県教育委員会 主事 守岡正司氏の御教示を得た。

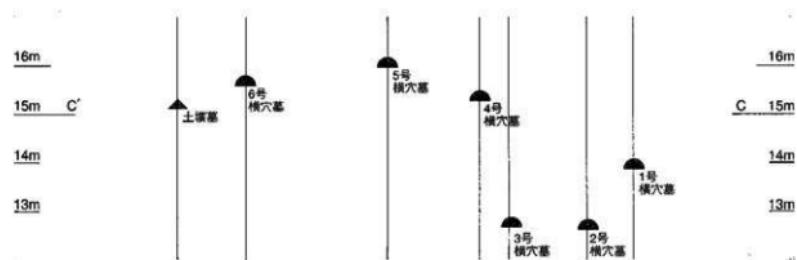
（2） 山陰横穴墓研究会 『出雲の横穴墓 一その型式・変遷・地域性一』 1997年

第4图 上海冶炼厂34号车间地基剖面图





第5図 上塙冶横穴墓群第34支群断面図



第6図 上塙冶横穴墓群第34支群立面模式図

横穴墓名	天井形態	玄室長	玄室幅	玄室高	埋葬主体	岩盤	出土遺物
1号横穴墓	アーチ形	不明	0.84m	推定 0.65m		凝灰質砂岩?	須恵器壺蓋2・环身2
2号横穴墓	アーチ形	不明	0.73m	推定 0.5m		凝灰質砂岩?	須恵器?
3号横穴墓	アーチ形	2.1m	0.96m	推定 0.6m	10cm前後の河原石による襖床	凝灰質砂岩?	須恵器壺蓋2・环身1・銀環2
4号横穴墓	アーチ形	1.95m	1.37m	推定 1.0m	石棺あるいは棺台	凝灰質砂岩?	須恵器短頭壺蓋1・短頭壺1・把手付鏡1・鉄製鏡1
5号横穴墓	アーチ形	1.63m	0.92m	推定 0.8m	襖床	凝灰質砂岩?	
6号横穴墓	アーチ形	1.70m	0.89m	不明		凝灰質砂岩?	

表1 上塩治横穴墓群第34支群一覧表

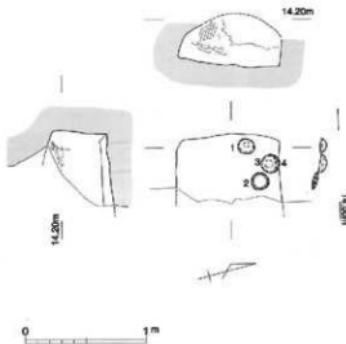
## 第4章 遺構と遺物

### 1. 上塩治横穴墓群第34支群

この支群はこれまで全く知られておらず、上塩治横穴墓群の多くが分布する大谷の奥部ではなく入り口に位置している。これまでこの付近では開口している横穴墓はなかった。1号～3号横穴墓は工事中に発見されたわけであるが、遺物が出土した段階で遺跡とわかり工事を中止しその旨教育委員会に届けられた。横穴墓が小規模であったことから1・2号横穴墓の大半は失われていた。また、遺物についてもすでに取り上げられたものもあった。開発者であるウッド開発と協議した結果、1・2・3号横穴墓については、すでに開口しており遺物も出土していたことから発掘調査を行い、周辺についても他の横穴墓の有無を確認することとした。調査の結果新たに4号横穴墓が発見されたが、現状のまま残すこととなった。しかしながら、翌年度にも再度拡張工事を実施する旨の協議があり、4号横穴墓の調査を実施することとなったが、調査中に5号横穴墓が発見されたことから、さらに南側もトレンチ調査を実施したところ6号横穴墓が発見された。6号横穴墓についてはそのまま残すこととなり、4・5号横穴墓の調査を実施した。

#### 1号横穴墓（図7・8）

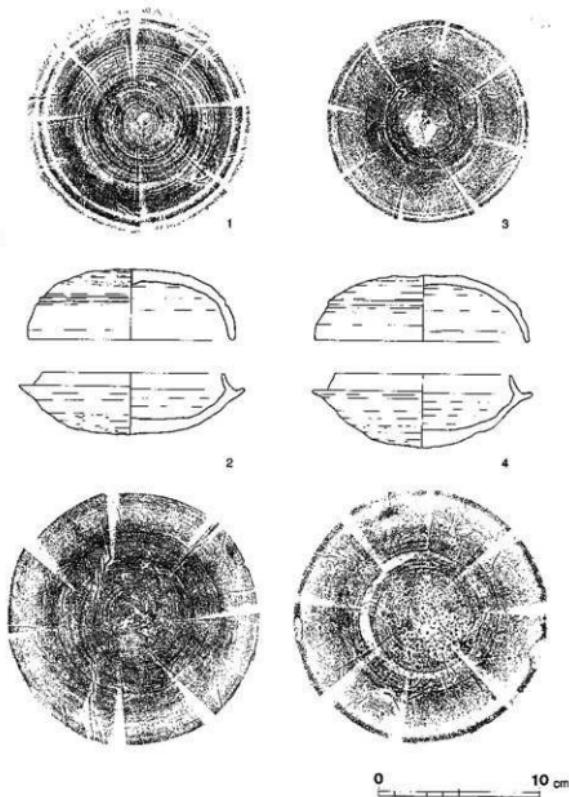
この横穴墓は、34支群の北端に位置し周辺の田面より2.9mの高さにある。工事中発見のため、横穴墓の大半は失われており、玄室最奥部を残すのみである。玄室は幅0.84m、高さは推定0.65mを測り、長さは不明である。開口方向はS～75°～Eである。天井の低い非常に小さい玄室である。横断面はアーチ形を呈するものと思われる。奥壁には幅10cmの加工痕が残っており上半は横方向に下半は下向きに加工



第7図 第34支群1号横穴墓

している。先端はU字形を呈している。

遺物としては須恵器の蓋環2組が右半分から出土している。すべて床面からの出土である。(1)は最も奥から出土した環蓋である。口径12.7cmで口縁端部はそのまま延び丸く仕上げる。天井部は回転ヘラ削りが施される。肩部は2条の沈線を施した後にナデ調整を行い突帯を表している。全体的にやや器壁が厚い。内面の中心部には赤色顔料が塗られている。(2)は环身で、口縁の立ち上がりと受け部は比較的シャープなつくりである。口径10.9cm・最大径14cmを測る。底部は回転ヘラ削りが施されている。削りの単位はやや不明瞭である。(3)と(4)は重なって出土しており、逆さまにした身の上に蓋を重ねている状態である。



第8図 第34支群1号横穴墓出土遺物

った。(3)は口径13.2cm・高さ4cmを測る。口縁は先端から7mmほど上に沈線を施した後にナデすることにより、段状に仕上げている。天井部は回転ヘラ削りが施される。肩部は(1)と同様に2条の沈線とナデによって突帯をつくっている。(4)は口径10.8cm・最大径13.7cmを測り、器形は丸みを帯びている。外面は灰被りで調整がわかりにくいが、底部は回転ヘラ削りである。(1)は大谷4期、(3)は大谷3期にあたる。

## 2号横穴墓(図9)

この横穴墓は1号横穴墓より1mほど間をおき一段下がったところに位置しており、レベル的には3号横穴墓に近い。玄室は最奥部の床面と奥壁の一部を残すのみである。玄室の幅0.73m高さは0.5m程度と想定される。1号横穴墓同様に非常に小規模である。現状からは平面プラン・横断面とも不明である。

奥壁はしっかりとした面を持っていなかったようで、平面形が湾曲している。床面には加工痕が残っている。

この横穴墓からも須恵器が出土したようであるが、すでに取り上げられており、どの須恵器が伴うか判断できないことから、遺構外遺物として取り扱っている。

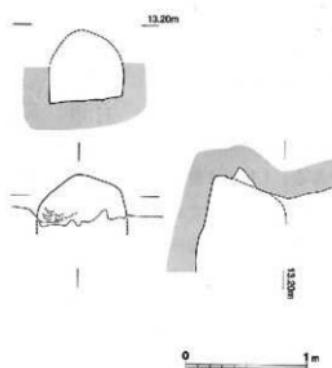
### 3号横穴墓(図10・11・12)

この横穴墓は、丘陵の斜面ではなく、斜面下の水平な面で検出された。当初工事による堆土が置かれていたが、これを除去したところ土壤墓状のプランが検出されたため調査を始めた。34支群中最も低い位置にあり、現在の水田面との比高は1.5mである。今回の工事以前にすでに天井部は破壊されており、下半分のみが残存していた。このため横穴墓の平面プランについては確認することができた。前庭から羨道までは残存しておらず、羨道も一部失われている。

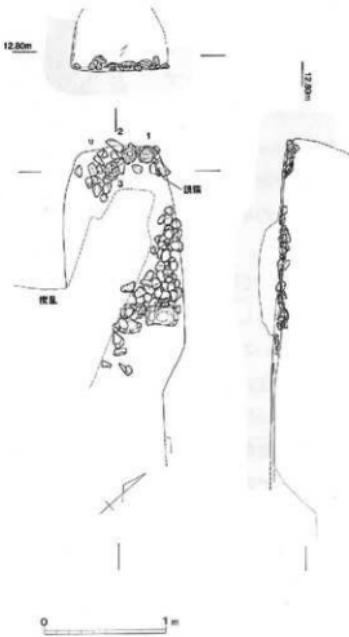
玄室は、長さ2.1m・幅は奥壁で0.7m・中央で0.96mを測る縦長方形プランである。奥から玄門に向かって幅が広くなる。袖は明確ではなく少しづつ幅が狭くなり羨道に至る。高さは60cm前後と推定され、横断はアーチ状を呈していたと思われる。開口方向はS~48°~Eである。

床は砾床となっており、大半は残っていないが10cm前後の河原石を全面に敷き詰めていたものと思われる。砾床をもつ横穴墓としては市内に地蔵堂第2支群1号横穴墓・祝廻横穴墓などがあるが、砾の大きさは5cm程度の小さいものであった。3号横穴墓の砾はこれらに比べると大きく大念寺古墳や上塙治築山古墳の砾床と同じ石が使用されている。

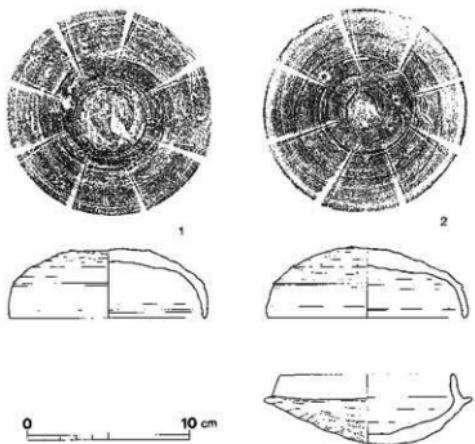
また、玄室奥右半分には砾床の上に須恵器



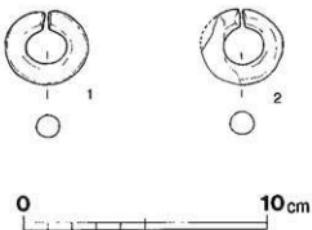
第9図 第34支群2号横穴墓



第10図 第34支群3号横穴墓



第11図 第34支群3号横穴墓出土遺物（1）



第12図 第34支群3号横穴墓出土遺物（2）

の蓋坏が並べてあり、うち二つは枕に転用されたものと思われる。出土遺物はこれらの須恵器の外に銀環が2点出土している。1点は須恵器転用の枕付近から出土しており、1点は出土地点がわからないが対になる物と思われる。

(1) は坏蓋で枕に転用された右側のものである。口径12.3cm・高さ4.3cmを測る。口縁部は外観は比較的直立して立ち上がり、端部内面には4mm上に沈線が施される。天井部は回転ヘラ削りが施されるが単位不明瞭で非常に雜で、削りの単位と単位の間が空く部分もある。天井中心部にはヘラおこし痕がよく残っている。肩部には、天井と口縁部の境に1条の沈線が施されているが、上段の沈線は不明瞭である。(2) も枕に転用された坏蓋で、口径は12.2cm・高さ4.4cmを測る。口縁端部内面には5mm上に沈線が施されている。天井部は回転ヘラ削りで、比較的単位は明瞭であるが、中心部の器壁は厚手である。天井と口縁部の境には1条の沈線が施されており、断面三角形の比較的シャープな突堤となっている。(3) は坏身で、口径10.7cm・最大径12.8cmを測る。口縁部が比較的長く垂直気味に立ち上がっている。底部は焼成時に変形しているが、比較的丁寧なつくりをしている。銀環が2点出土しており、(2) は枕に転用された須恵器（1）の近くから出土している。(1) は長径3.4cm・短径3.2cmを測り、断面は径0.9cmで円形である。(2) もほぼ同様の大きさで、両者とも銅芯銀張りである。

#### 4号横穴墓（図13・14・15・16）

この横穴墓は、今回の工事以前に、横穴墓の上部を掘削し倉庫として利用していたようで、このときには羨道部と玄室の天井は失われたようである。

支群のほぼ真ん中に位置しており、全長は6.25mを測り、狭長な墓道状の前庭部がよく残っている。開口方向はS~71°~Eである。

前庭部は、長さ2.76m、幅は羨門側で0.81m、入り口で0.4m、高さ1.1mを測る。平面プランは羨門から入り口に向かって徐々に幅が狭くなってしまっており、羨門から1.6m入り口側に段がついている。

羨門は床面で幅0.71mを測り、下部のみ削り込み状の加工がなされている。この削り込みは幅10cm・奥行き10~12cmを測る。床から20cm上まではこの加工があるが、それより削り込み側面は外傾して立ち上がり羨道側壁へとつながる。また、10層上面には幅91cm・長さ30~45cmの石が置かれており、この石と側壁との間からは短頸壺と蓋が出土している。これらもやはり10層上面にあり、この層はあまり乱れがないことから、これらは元位置を保っていると思われる。

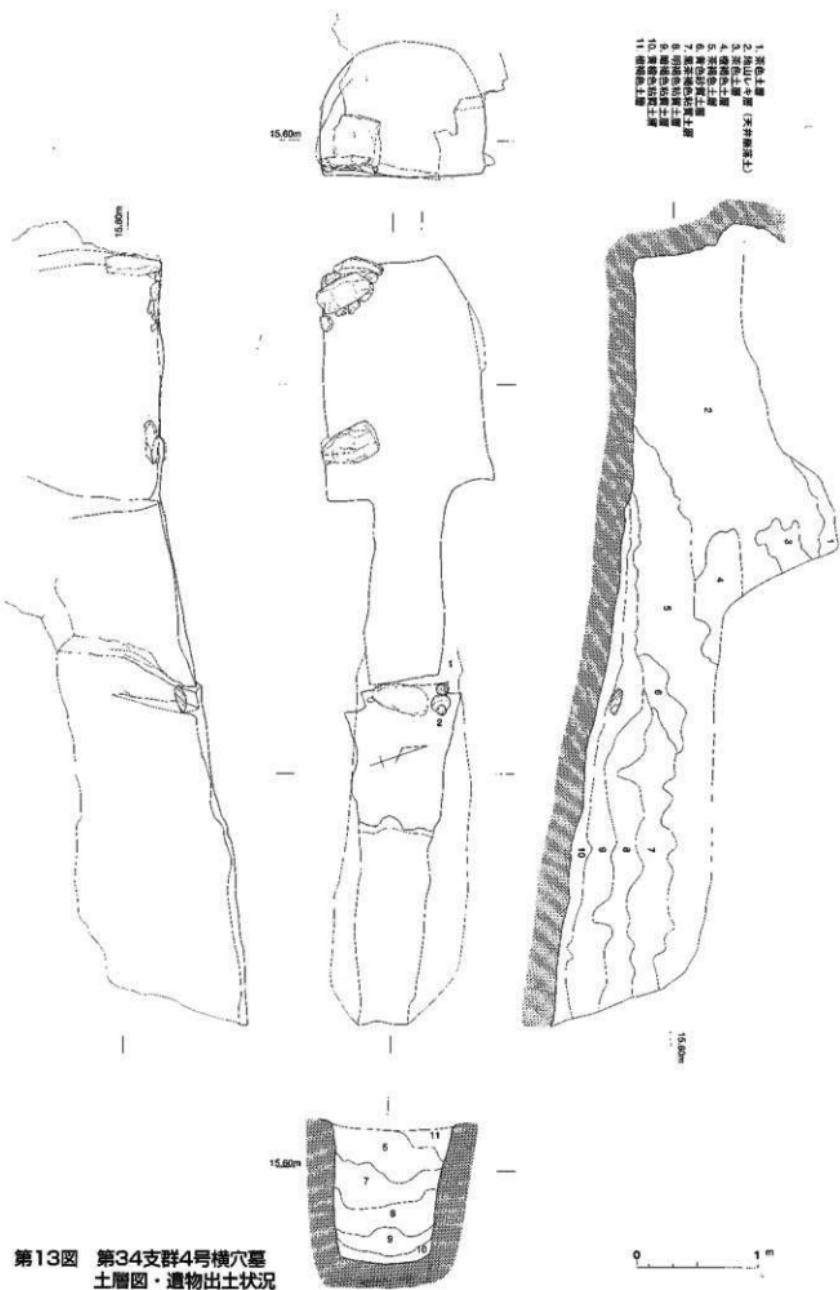
羨道は幅0.61m、長さ1.49m、高さ1m以上である。羨道も比較的長く、横断は台形を呈する。

玄室は、長さ1.95m、幅は前壁で1.37m・奥壁で0.93m、高さは1mまで残存している。平面プランは縦長の長方形であるが、右側壁が内側に入っているので右隅が鈍角になっている。袖は明確に造られており左側で0.34m、右側で0.34mを測る。横断はアーチ形を呈し、奥壁・前壁とも垂直に立ち上げている。側壁には幅12cmの先端の内い加工痕が横方向に残っている。

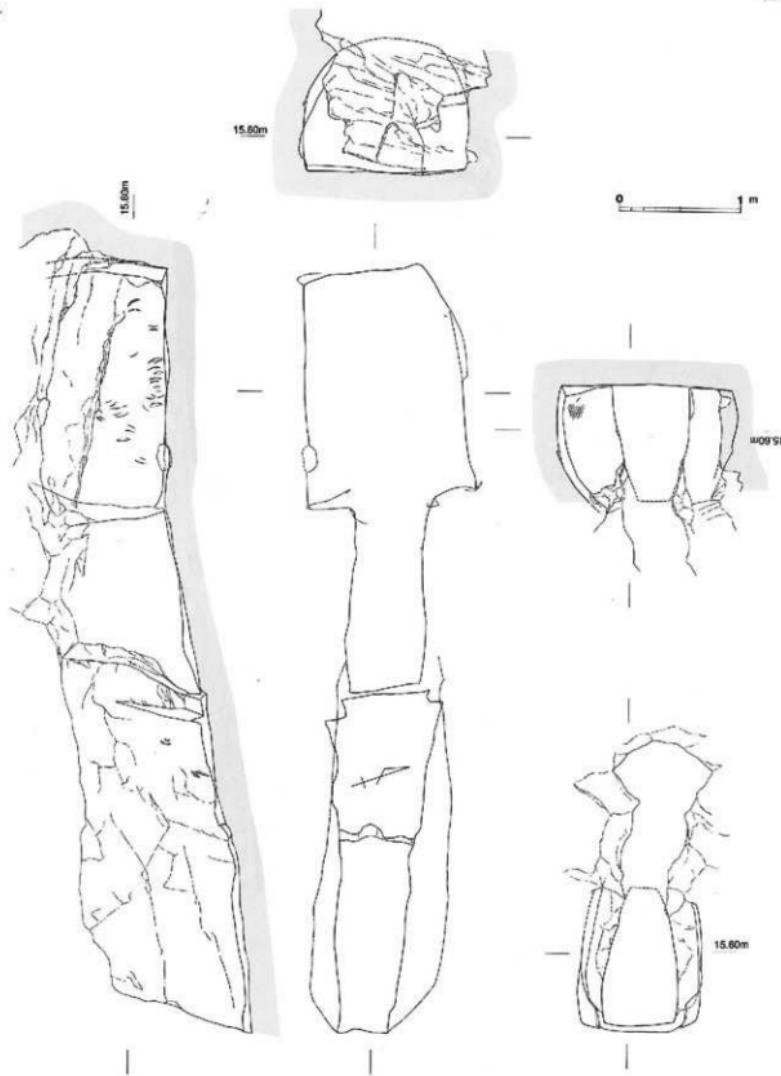
また、玄室左半分には凝灰質砂岩9個にて石棺あるいは棺台がつくられている。盗掘を受けているため他にも部材があった可能性もあるが、現状では玄室左奥隅に8個、左袖から30cmはなれて1個の石材がある。左奥には幅40cm・高さ45cm・厚さ7cmほどの平面が湾曲した石を奥壁に接して直立させ、その内側に幅58cm・長さ23cm・厚さ8cmを測る不整長方形の石を床石として据えている。さらにこの石の下には10cm前後の石を据えて床石の安定を図っている。

この横穴墓は、比較的残りがよいものもあって形態がよく分かることからその特徴を上げておく。玄室は前壁がしっかりと造られている。このため平面プランで見ると袖が明確にあることになる。玄室の高さも支群中の他の横穴墓に比べると高い。墓道状の前庭部がよく残っており、これだけ長いものは上塙治横穴墓群の中では例がない。

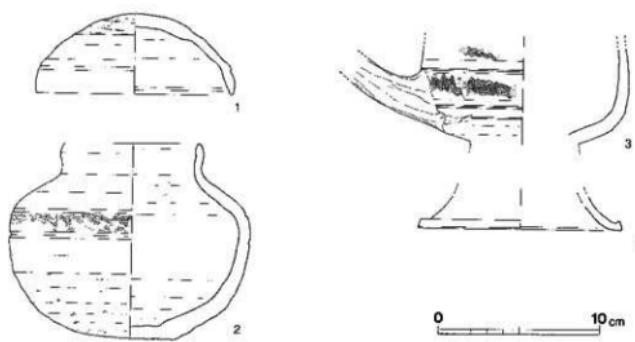
出土遺物としては（1）・（2）が羨門で出土しており、これらはセット関係にある。（2）は短頸壺で、高さ12.1cm・口径部径8.4cm・胴部径15cm・底径5.7cmを測る。口径部は直立しており、端部は丸く收める。胴部には2条の沈線の間に波状紋が施されているが、非常に雑でピッチも一定していない。胴部下半は回転ヘラ削りである。（1）は（2）の蓋で、口径12.2cm・高さ4.9cmを測る。壺の蓋であることから、口径のわりに高さがあり、丸みを持った外観である。口径端部は内面に沈線を施した後にナデることによって、軽い段に仕上げる。天井部は回転ヘラ削りで、削りの単位は不明瞭である。（1）・（2）ともに焼成不良である。（3）は把手付き椀で、破片であるためはっきりしないが、底部に若干だが下がる部分が残っており、（4）の脚が接合する可能性がある。（3）は雑ではあるが波状紋が2段に施され、下段の波状文の下には、2条の沈線により突帯が表現されている。また、2段の波状紋の間に1条の沈線が施される。把手は胴部の下半についており、面取りがされている。（3）・（4）はともに前庭部の盗掘後に堆積した5層から出土している。



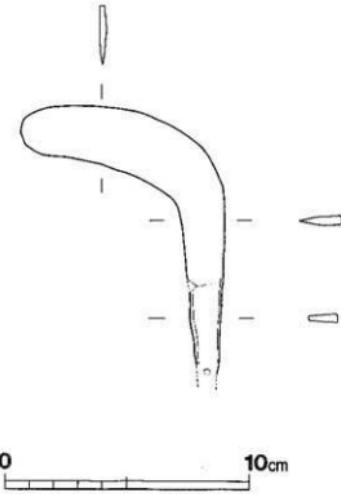
第13図 第34支群4号横穴墓  
土層図・遺物出土状況



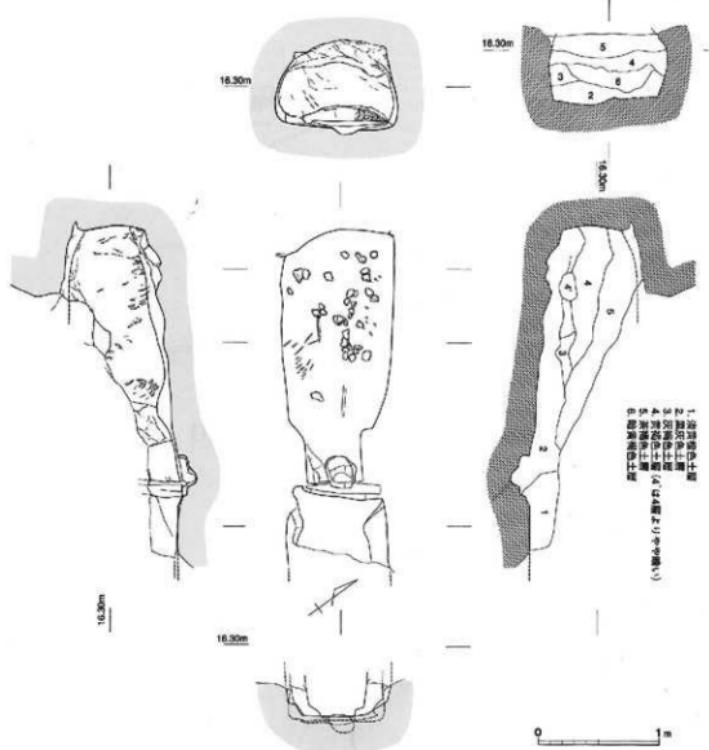
第14図 第34支群4号横穴墓



第15図 第34支群4号横穴墓出土遺物（1）



第16図 第34支群4号横穴墓出土遺物（2）



第17図 第34支群5号横穴墓

また、鉄器（図16）が4層から1点出土している。全体は逆L字形をし湾曲した刃部と直線的な茎部からなっており、鎌と思われる。刃部は長さ7.5cm、幅2.5cmを測り内湾しており、先端は丸く仕上げる。

### 5号横穴墓（図17）

この横穴墓も平成5年度に4号横穴墓とともに調査した横穴墓である。1～4号横穴墓までは平成4年度の調査で確認されていたが、南側にさらに支群が広がる可能性があることから調査を進めたところこの5号横穴墓を確認することとなった。なお、5号横穴墓のさらに南はトレンチによって遺構の状況を確認したところ、さらに6号横穴墓を確認した。しかしながら工事予定地外で遺構に影響を及ぼすことがないためこのときは本調査にはいたらなかった。

この横穴墓は、この支群の中ではやや高いレベルに位置している。天井部はすでに崩落しており、玄室の前半分から前庭部にかけては下半分以下を残すのみである。開口方向はS~53°~E前庭は長さ0.47mを残すのみで、幅は床面で0.5mを測る。前庭部の側壁は床面から垂直に立ち上がりず、床から高さ10cm程度は外傾して立ち上がった後に垂直になる。羨門部は幅0.72mで前庭よりやや幅が広く、床面には、幅0.63m・長さ7cm~16cm・深さ4cmの溝状の加工がある。これは閉塞の板をはめ込むためのものと思われる。

羨道は幅0.4m・長さ0.35mを測りひじょうに短い、また、一部羨門にかかるようにしてピットが掘られている。ピットは幅26cm・長さ26cm・深さ10cmを測る不整円形を呈し、断面は2段になっている。

玄室は、長さ1.63m・幅は奥壁で0.92m玄門側で0.71mを測る縱長長方形である。袖部分は明確に造られておらず徐々に幅が狭くなり羨道へとづく。高さは0.8m程度と推定され、断面はアーチ形である。非常に天井の低い小規模な横穴墓である。盜掘を受けていたため出土遺物は皆無であったが、玄室床面には疊がわずかに散乱しており、疊床が施されていたようである。

## 6号横穴墓（図18）

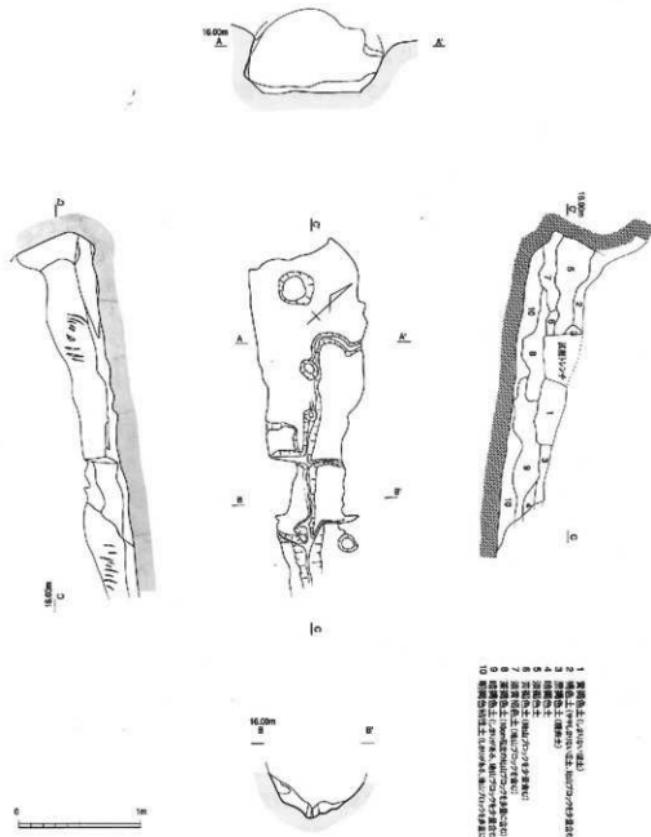
周知の遺跡である上塩治横穴墓群第34支群は人井谷入口西側斜面に所在し、平成4年度から平成5年度までに出雲市教育委員会が1~5号横穴墓の調査を実施している。平成8年度調査を実施した6号横穴墓は6穴中最も南側に位置し、開口方向はS~48°~Eである。

上塩治横穴墓群第34支群は、谷奥の支群がしっかりした岩盤に造墓されているのと異なり、軟質の岩盤に造墓されている。

調査の結果、軟質の岩盤に造墓された6号横穴墓の残存状況は悪く、盜掘を受けているものと見られ、遺物は全く出土しなかった。天井部は削平されており、詳細は不明であるが、残存する界線の傾斜から九天井系の可能性がある。平面プランは前庭部が半分以上削平されているものの、残存長約3.3mに対し残存幅約1.1mと細長い。

前庭部は削平により不明な点も多いが、現存長約0.5m、幅約0.7mを測る。現存する壁は高さ20~30cmであるが、南側壁面には長さ4~12cm、幅約1cmのノミ状工具痕が9条残る。約40cmの長さがある羨道部は断面がU字形を呈しており、天井部分は削平されているが、現存する壁の高さは20~50cmを測る。また羨道部の幅は羨門付近と玄室側で約45cmとほぼ同じで、羨門付近には幅約65cmの閉塞施設を設けたと推測される例り込みが確認できた。天井は大部分が崩落しており、壁は約35cmが残るが、南側壁面には長さ5~18cm、幅約0.5~2cmのノミ状工具痕が10条確認できる。

玄室は奥行約1.7m、玄室幅1.1mを測り、南側壁面では袖が認められるものの、北側は袖が不明確で徐々に幅が狭くなりそのまま羨道に至る片袖式である。床面には奥壁から羨道部に向けて緩やかな傾斜があり、北側壁面から床面中央部を通り羨道部にかけて造られた排水溝を確認したが、壁沿いの溝は玄門玄室側だけであった。



第18図 第34支群6号横穴墓

また、羨道部から玄室にかけて浅いピット状の落ち込みを4つ検出したが、規格性はなく遺物もないためその性格は不明である。

遺物が確認できなかったため、時期については不明な点が多いが、平面プランが縦長であること、軟質の岩盤に造墓されていることなど、出雲5・6期<sup>(1)</sup>の遺物が出土する谷奥の横穴墓とは明らかに違ったがあり、出雲4期の遺物が出土する横穴墓の特徴が顕著に見られることから、上塩治横穴墓群の中では古い段階の横穴墓である可能性がある。

## 2. その他遺構

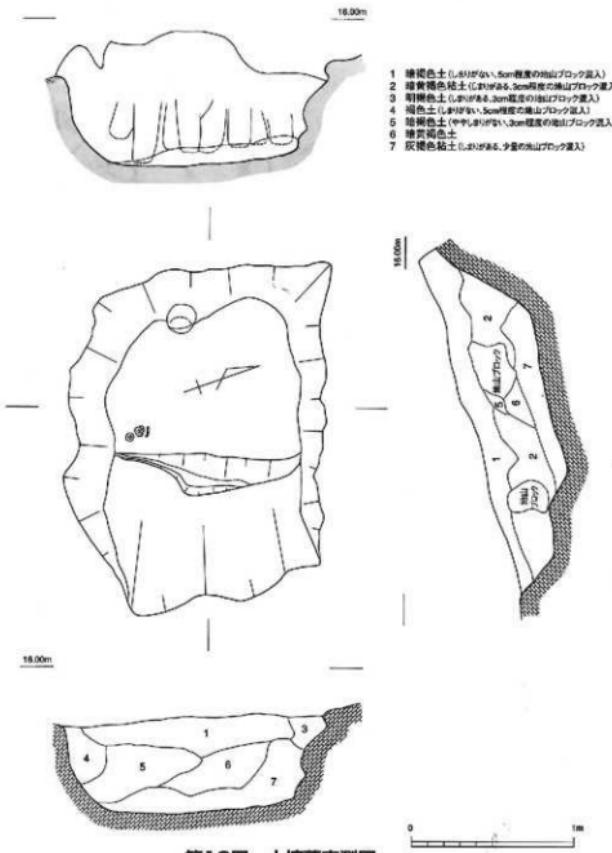
### (1) 土壙墓

6号横穴墓の西方約1.2mに近世の土壙墓1基を検出した。平面プランは長方形に近く、東西約1m、南北約0.7mを測る。現存の深さは約45cmで、西側壁面に幅約10cmの鋸状工具痕が数条認められる。床面中央には東西約50cm、南北約60cmの落ち込みがあり、何かを埋設したと考えられる。

土壙墓内からは寛永通宝6枚と肥前系染付碗1点が出土したが、人骨は出土しなかった。

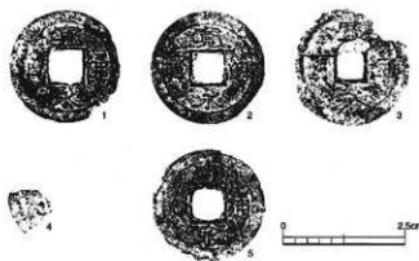
寛永通宝は六道銭であると考えられ、新寛永が混在していること<sup>(2)</sup>と肥前系染付碗<sup>(3)</sup>から、土壙墓の時期は江戸後期と考えられる。

土壙墓からは寛永通宝6枚、肥前系染付碗1点が出土した。1は新寛永で寶字はかなり潰れているが、寛・寶字の脚が明確に分けられる。裏面は潰れていのため不明である。2も新寛永である。通字は完全に潰れてい

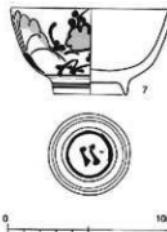


第19図 土壙墓実測図

るが、寛・寶字の脚が明確に分けられる。裏面は潰れていた。3は寛永通宝であるが、摩耗が激しいため新旧は不明である。中央の穴は形が確認できる4枚の中では最も小さい。裏面では中央の穴の周囲と外縁に縁取が見られる。4は寶字部分だけが出土した。寶字の脚の部分が分かれているようなので、寛永通寶であれば新寛永と考えられる。裏面は潰れているため不明である。5寛永通宝であるが、寛・寶字ともに脚部が摩耗しており、新旧は不明である。裏面は摩耗しており不明である。6は寛永通宝であることは確認できたが、残りが悪く脆いため出土した状態で取り上げできなかった。7は肥前系染付碗で口径9.8cm、底径4.6cm、器高5.3cmを測る。見込には溶着痕が2点見られ、口縁部は内湾しながら立ち上がり外側に伸びる。染付の文様は内面には見られないものの、外面に扇や花が勢いよく描かれており、高台内には円の中に2本の線が書かれていた。見込には何も描かれていなかった。



第20図 土壙墓出土古銭



第21図 土壙墓出土染付碗

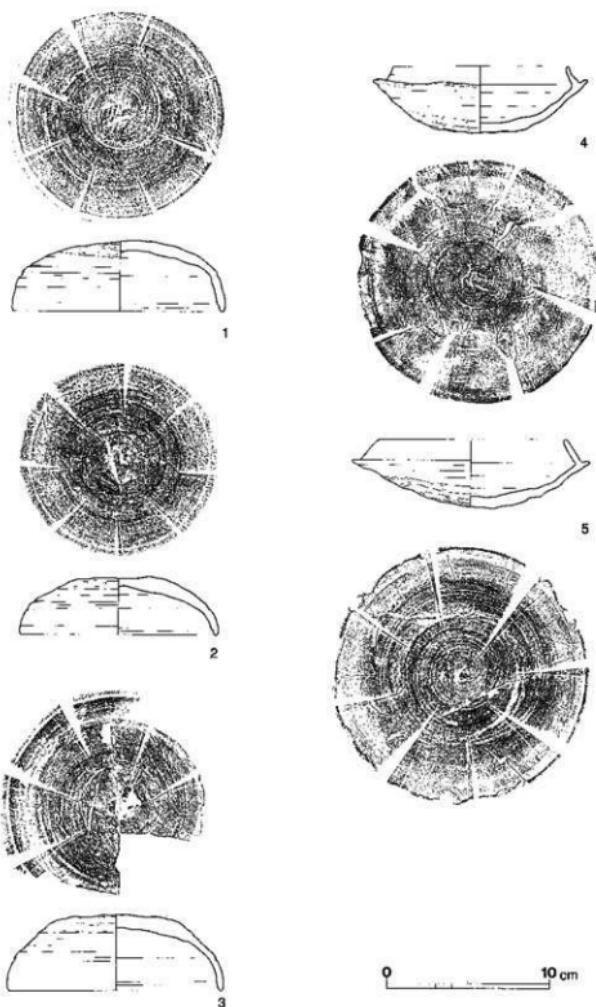
### 3. 遺構外出土遺物

(1)～(5)はこの支群に伴うものであるが、どの横穴墓から出土したか同定できないものである。2号横穴墓にも須恵器があったことが分かっており、この中にそれらが含まれていると思われる。(1)～(3)は蓋である。(1)は口径13.1cm・高さ4.4cmを測る。口縁端部内面には沈線を施した後撫であることにより段状にしあげている。肩部には1条の沈線を施し上側は強く撫ることによって突帯を表現している。天井部は回転ヘラ削りが施されるが単位は不明瞭である。天井中心部にはヘラおこしの傷が残っている。(2)は口径12cm・高さ3.6cmを測る小型の蓋である。全体に丸みを帯びており肩部にも沈線を施さず両側を撫することにより不明瞭ながら突帯を表現している。口縁端部内面には沈線を入れた後撫でており(1)ほど明瞭ではないが段状に仕上げるが、この沈線は半分しかめぐっていない。(1)と(2)は色調が黒灰色で他のものと異なることや、口縁端部の特徴が共通することから、法量の大小のセットとして作られた可能性が考えられる。(3)は口径13.2cm・高さ4.7cmを測り、比較的器高が高いこともあり外観は丸みを帯びている。肩部には1条の沈線が施されるのみで形骸化している。天井部のヘラ削りは中心まで及ぶが、単位不明瞭で削りが及ばず間が空く部分もある。雑な削りで天井部の器壁が厚いことから削りが浅いものと思われる。口縁端部内面には非常に弱い沈線が施されている。(4)は口径11.5cm・最大径14.7cmを測る、口縁部の立ち上がりは内傾しており直線的にのびる。削りは単位が不明瞭で雑である。(5)は口径10.6cm～11.2cm、最大径13.2cm～13.5cmを測る。底部のヘラ削りは単位がやや不明瞭であるが比較的シャープなつくりをしている。口縁の立ち上がりは器壁が薄い。

註(1) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』1994年

(2) 島根県教育委員会 主幹 西尾克己氏に御教示いただいた。

(3) 島根県教育委員会 主事 平石 充氏に御教示いただいた。



第22図 遺構外出土遺物

## 第5章 総括

調査の結果、上塩治横穴墓群第34支群からは出雲3・4期<sup>(1)</sup>の須恵器が出土した。

出雲平野西部で確認された横穴墓では、現在のところ、出雲4期の横穴墓が最も古いと考えられており、地蔵堂横穴墓群第2支群（地蔵堂北横穴墓群）1・2号横穴墓、地蔵堂横穴墓群第3支群1号横穴墓、祝廻横穴墓などがある。

神戸川左岸に所在する地蔵堂横穴墓群は、上塩治横穴墓群の南西約2.5kmの出雲平野南辺丘陵斜面に3支群が確認されている。

第2支群1号横穴墓は継長プランを呈し、袖の部分は明確でなく、側壁から徐々に幅が狭まりそのまま狭道に移行する徳利状の形態をしている。床面には砾床が造られ、排水溝が各壁沿いから玄門付近で合流し羨門まで伸びる。天井形式はアーチ形である。

第2支群2号横穴墓も継長プランを呈し、袖の部分は明確でなく、側壁から徐々に幅が狭まりそのまま狭道に移行する徳利状の形態をしている。床面には須恵器床が造られており、排水溝は各壁沿いから玄門付近で合流し羨門まで伸び、玄室側にも20cm伸びる。天井形式はアーチ形である<sup>(2)</sup>。

第3支群1号横穴墓は継長長方形プランを呈し、片袖は明確に認められるが、反対側では袖が認められない。床面には2~3cmの小石で砾床が造られ、玄室から前部にかけて排水溝が設けられている。天井形式はアーチ形と考えられる<sup>(3)</sup>。

朝山地区の小盆地に所在する祝廻横穴墓は、「出雲國風土記」記載の宇比多伎山の中腹から北に派生した丘陵麓東斜面に在する。

平面プランは羨道部の大部分が削平されており、水害の影響で袖部についても不明な点が多いが、継長長方形を呈すものと考えられる。床面には10cm前後の河原石で砾床が造られており、奥壁から両側壁に沿って玄門部まで排水溝が伸びる。天井形式はアーチ形である<sup>(4)</sup>。

これらの事例を総合すると、出雲4期の横穴墓は軟質の岩盤に造墓されることが多く、平面プランは継長で、床面には排水溝、砾床または須恵器床が造られる場合もある。また天井形式はアーチ形のみである。一方、袖部分は明確に造られているものもあるものの、地蔵堂横穴墓群第2支群1・2号横穴墓や祝廻横穴墓に見られるように、徐々に幅が狭くなって羨道に至るあまり明確でないものもある。

これらの特徴は、近年、出雲4期の横穴墓の特徴として指摘されているところであるが<sup>(5)</sup>、今回の第34支群の調査でもその特徴は確認することができた。

従来、上塩治横穴墓群で確認された横穴墓は四注式系妻入整正形が大部分を占めていたが、第34支群では丸天井系アーチ形の横穴墓が大半を占めていた。上塩治横穴墓群で確認された丸天井系の横穴墓には、出雲4期の須恵器が出土した第14支群10号横穴墓など、古い段階の横穴墓が多い<sup>(6)</sup>。

上塩治横穴墓群の横穴墓の多くは、出雲5期以降の遺物が出土し、平面プランは整正形である。一方、出雲3・4期の遺物が出土した第34支群は、平面プランが継長で、6号横穴墓に至っては片袖が不明確である。従って、平面プランや天井形式から見ると、第34支群は上塩治横穴墓群で確認される多くの

支群とは異なり、出雲4期の横穴墓と同じ特徴が見られる。第34支群からは出雲3期の遺物も出土しており、当支群は出雲3期まで通る可能性がある。出雲5期以降の横穴墓が多い上塩治横穴墓群では、第34支群は最も古い段階の支群のようである。

また上塩治横穴墓群で確認される横穴墓は、大部分が堅い凝灰岩の岩盤に造墓されているが、第34支群は軟質な岩盤に造墓されている。

出雲4期の横穴墓群である神門横穴墓群や地蔵堂横穴墓群も全て軟質な岩盤に造られているが、近年になり調査例が増加し、古い形態の横穴墓は凝灰質砂岩などの軟質な岩盤に造墓されることが明らかになってきた。

しかしながら出雲平野西部では、出雲3期の横穴墓は確認されておらず、第34支群が出雲3期まで通るか否かは、第34支群と出雲4期の横穴墓の形態に差異の見られない現状では、今後の調査例の増加を待って改めて検討したい。

現在のところ、出雲平野西部では出雲4期に横穴墓が出現したと考えられているが、第34支群はこの時期あるいはそれよりも古い横穴墓と考えられ、上塩治横穴墓群でも最も古い横穴墓に分類できる。

現段階では上塩治横穴墓群は次のような流れを持つと考えられる。

上塩治横穴墓群は出雲3期または出雲4期に造墓され始めた。この時期の横穴墓群と考えられる第34支群は軟質な岩盤に造墓され、平面プランは縦長で、横穴墓の中には排水溝が造られているものもある。天井形式はアーチ形である。

出雲5期になると、第27支群に見られるようにアーチ形天井に軒が造られるようになる<sup>(7)</sup>。また家形・方形プランのものが出現し、天井形式の主流も家形に替わっていく。羨道は幅広で短いものが登場し、凝灰岩に横穴墓が造墓され始める。

現在のところ、上塩治横穴墓群で確認された横穴墓の中で、凝灰岩に造墓された最も古い横穴墓は、第14支群10号横穴墓である。この横穴墓の天井形式はアーチ形であるが、平面プランは僅かに縦長な程度である<sup>(8)</sup>。出土遺物には出雲4期の須恵器が含まれており、出雲4期のうちから凝灰岩への造墓が行われていた可能性も考えられる。

出雲6期には、横穴墓は少量造墓されるが追葬が多くなり、出雲7期の頃まで追葬が行われた<sup>(9)</sup>。

上塩治横穴墓群は現在までに実施された調査により、その性格がかなり解明されようとしている。

しかしながら、調査の進行に伴い新たな問題点が生じてきた。現在のところ、上塩治横穴墓群は第38支群171穴が確認されているが、同じ支群の中でも2~5穴程度のまとまりが認められるものもあり、再考の時期に来ていることが指摘されている<sup>(10)</sup>。

上塩治横穴墓群には未確認の横穴墓がかなりあると推定されており、今後の調査も大いに期待されるところである。

註（1） 大谷晃二 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』 島根考古学会誌 1994年

（2） 松山智弘 「地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書 一下古志地区一般農道整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書一」

出雲市教育委員会 1994年

（3） 高橋智也 「地蔵堂横穴墓群第3支群」「出雲市埋蔵文化財調査報告書 第7集」 出雲市教育委員会 1997年

- (4) 西尾良一 「祝賀横穴」「出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」  
建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1980年
- (5) 註(2)と同じ
- (6) 鳥谷芳雄編 「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ  
大井谷石切場跡・上塩治横穴墓群第14支群・第15支群・第16支群」 島根県教育委員会 1997年
- (7) 西尾克己編 「中国電力高压送電線鉄塔工事にともなう半分城跡横穴墓群発掘調査報告」 出雲市教育委員会 1979年
- (8) 註(6)と同じ
- (9) 守岡正司 「出雲市上塩治横穴墓群」「第7回 山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓 一その型式・変遷・地域性一」  
山陰横穴墓研究会 1997年
- (10) 島根県教育委員会 主事 守岡正司氏に御教示いただいた。

観察表(1)

図版番号	横穴名	器種	径 (最大径)	器高	形態・調整
8-1	1号横穴墓	坏蓋	12.7cm	4.3cm	肩部に2条の沈線。天井部は回転ヘラ削り。内面に赤色顔料。
8-2	1号横穴墓	坏身	10.9cm (14cm)	3.8cm	底部は回転ヘラ削り。
8-3	1号横穴墓	坏蓋	13.2cm	4cm	肩部に2条の沈線。天井部はヘラ削り。口縁端部内面には沈線の後撫でにより段状になる。
8-4	1号横穴墓	坏身	10.8cm (13.7cm)	4.5cm	底部は回転ヘラ削り。
11-1	3号横穴墓	坏蓋	12.3cm	4.3cm	肩部は1条の沈線。天井部は雑なヘラ削り。口縁端部内面には1条の沈線を施す。
11-2	3号横穴墓	坏蓋	12.2cm	4.4cm	肩部は1条の沈線とナデによりシャープな突帯を作り出す。天井部はヘラ削り口縁端部内面には1条の沈線を施す。
11-3	3号横穴墓	坏身	10.7cm (12.8cm)	4.3cm	底部は回転ヘラ削り。焼成時に変形しているが、比較的丁寧なつくりである。
15-1	4号横穴墓	蓋	12.2cm	4.9cm	肩部は1条の沈線を施す。天井部は回転ヘラ削り。口縁端部内面には沈線の後撫である。
15-2	4号横穴墓	短頸蓋	8.4cm (15cm)	12.1cm	肩部2条の沈線とその間に波状紋を施す。底部は回転ヘラ削り。口縁はシャープでなく丸く収める。
15-3	4号横穴墓	把手付腕			肩部に2条の沈線を施し、その間に波状紋を施す。上段の沈線の上にも波状紋が施される。把手は面取りがされている。
15-4	4号横穴墓	脚	12.6cm		把手付腕と接合する可能性がある。
22-1	遺構外	坏蓋	13.1cm	4.4cm	口縁端部内面は段状に仕上げる。肩部には1条の沈線。天井部は回転ヘラ削り。
22-2	遺構外	坏蓋	12cm	3.6cm	口縁端部内面は一部段状に仕上げる。肩部はナデによって突帯を表現する。
22-3	遺構外	坏蓋	13.2cm	4.7cm	口縁端部内面はタッチの弱い沈線を施す。天井部は非常に雑な回転ヘラ削り。
22-4	遺構外	坏身	11.5cm (14.7cm)	4.1cm	口縁の立ち上がりは内傾している。底部の回転ヘラ削りは雑である。
22-5	遺構外	坏身	10.9cm (13.3cm)	4.2cm	底部のヘラ削りは単位が不明瞭だが比較的シャープなつくりである。

観察表(2)

図版番号	遺構名	種別	径	孔径	備考
18-1	土壙墓	寛永通寶	23mm	7×7mm	新寛永
18-2	土壙墓	寛永通寶	24mm	6×6mm	新寛永
18-3	土壙墓	寛永通寶	24mm	5.5×5.5mm	新寛永
18-4	土壙墓	寛永通寶?	不明	不明	新寛永?
18-5	土壙墓	寛永通寶	24mm	6.5×6.5mm	新寛永
18-6	土壙墓	寛永通寶	不明	不明	

観察表(3)

図版番号	遺跡名	種別	機種	口径 (最大径)	底径	器高	備考
18-7	土蓋墳墓	染付	碗	9.8cm (10cm)	4.3cm	5.3cm	見込に溶着痕2点残る。高台疊付無輪。外面には線描・点描・濃みの手法により、刷・花文を施描し、高台付近には線描を施す。高台見込には円内に2本線が施描されている。2本線は「大明成化年製」の簡略化したものである可能性がある。

# 図 版



大井谷遠景（右側の建物の裏が第34支群）



第34支群発見状況

图版2



1号横穴墓完掘状况



1号横穴墓遗物出土状况



2号横穴墓完掘状况



(左) 3号横穴墓石床状况

(下) 3号横穴墓出土物状况



圖版4



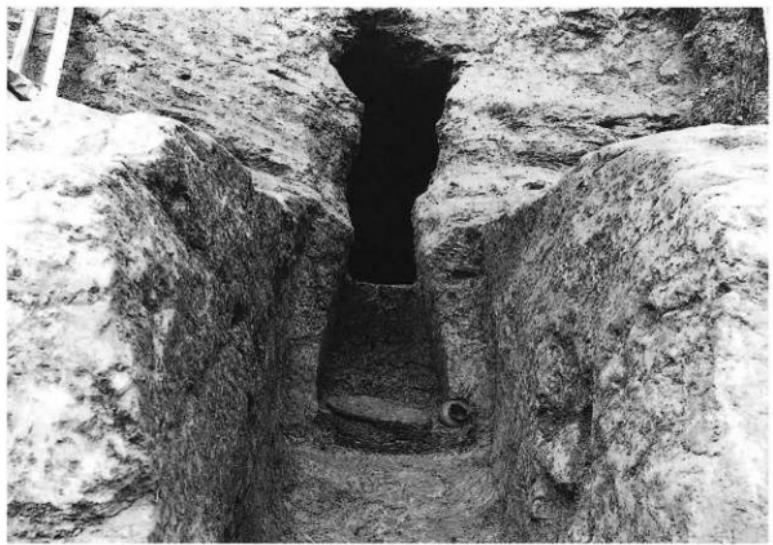
3号横穴墓遺物出土狀況



3号横穴墓完掘状况



4号横穴墓検出状況

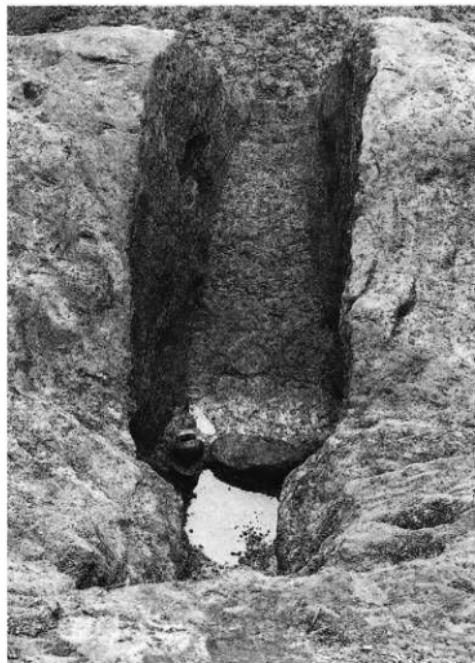


4号横穴墓前庭部完掘状況

図版6



4号横穴墓羨門部遺物出土状況



4号横穴墓前庭部完掘状況（上から）



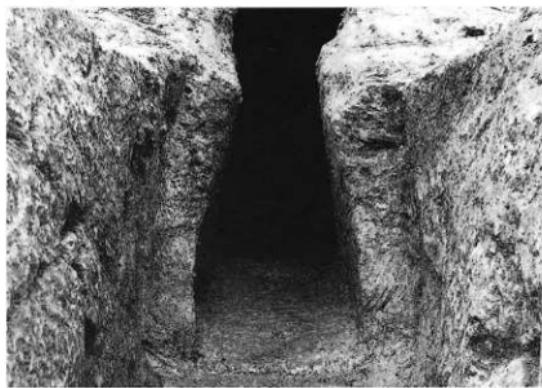
4号横穴墓前庭部土層堆積状況



4号横穴墓玄室完掘状况



4号横穴墓棺台



4号横穴墓羨門部完掘状況



4号横穴墓玄室前壁



4号横穴墓玄室側壁



5号横穴墓半さい状況



5号横穴墓羨門



5号横穴墓完掘状況

図版10



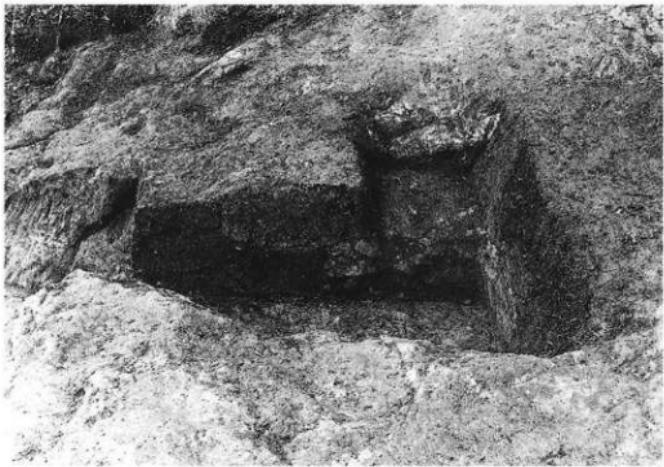
横穴墓配置状況（右から4号横穴墓、5号横穴墓、6号横穴墓）



横穴墓配置状況（左から6号横穴墓、5号横穴墓、4号横穴墓）



6号横穴墓土層堆積状況（正面から）



6号横穴墓土層堆積状況（玄室部分）

図版12



焚道部壁面加工痕



玄室壁面加工痕



6号横穴墓平面プラン



作業状況

図版14



土壤墓土層堆積状況（北側から）



肥前系染付碗出土状況



古錢出土状況



6号横穴墓と土塙墓



土塙墓完掘状況



土塙墓加工痕

圖版16



(1) 第34支群1号横穴墓出土遺物



(2) 第34支群3号横穴墓出土遺物